

ゴータマ・ブツダの指導の事蹟

—仏弟子の出会い—

中村 元

序

人はその一生涯を通じて絶えず他の人々によって激発され、激励され、教示を受けている。他の人々との出会いということは常に行われているのであるが、ときには或る特定の人との出会いが、その人の生涯にとって重大な転換をひき起すことも起る。仏教の開祖ゴータマ・ブツダ（釈尊）はまさにそのような他人の人格における全面的転換を起させた人であった。ゴータマ・ブツダとの出会いは仏典のうちにいろいろと述べられているが、いまここではその若干の事例を検討することにしよう。

第一節 さとりを開く以前の出会い

ゴータマ・ブツダが国王をさえも帰依させたということは、仏教発展のための重要な要因であった。

後代の仏教の発展を見ても、社会的に大きく発展するときには、必ず国王

の帰依尊信を得ていた。アショーカ王やカニシカ王の場合のごときはその適例である。古代仏教における巨大な建造物は、国王の政治的経済的後援が無ければ出現しなかったであろう。

ところで国王がゴータマ・ブッダに会ってふと帰依するようになったということは、すでにかれの生存時期に起ったのである。釈尊とビンピサーラ王との出会いが、仏典の中には生き生きと伝えられている。

王舎城の都の跡は、現在は荒廃に帰して一面に草木が茂っているだけであるが、国王の都城としてたしかに要害の地であったにちがいない。北側の溪谷に小さな川が流れているが、そのあたりに城門があり、釈尊はそこに出入された土地の人は説明している。ひとたびその城門を鎖してしまえば難攻不落であった。だから王舎城は諸王国が対立して、互いに侵略を繰り返しているときの都としては適当であった。しかしマガダ国が強大になり、他の国々から侵略される恐れがなくなると、王舎城は都として不適当である。だから、マガダ国は、後代になると、首都を水陸交通の要衝であるパータリプトラ（いまのパटना）に移してしまった。それはアジャータシャトル王の子であるウダーイン王⁽¹⁾ (Udayin または Udayibhadra) のときであると考えられている。しかし釈尊の当時には王舎城はマガダの首都として栄えていたものであり、『マガダの最大の都』⁽²⁾と呼ばれている。或いはインド第一の繁華な都であったかもしれない。『スッタニパータ』のかなり古い部分⁽³⁾の或る短篇⁽⁴⁾に釈尊が王舎城に来た次第が述べられている。

『眼ある人（＝釈尊）は、いかにして出家したのであるか、かれはどのように考えた末、出家を喜んだのであるか、かれの出家をわれは述べよう。「この在家の生活は狭苦しく、煩わしくて、塵のつもる場所である。ところが出家はひろびろとした野外であり、（^{あがい}煩いがない）」と見て、出家したのである。

出家したのちには、身による悪行をはなれた。ことばによる悪行をもすてて、生活をすっかり清めた。

目ざめた人（ブッダ）はマガダ国の（首都）、山に囲まれた王舎城に行

った。すぐれた相好にみちた（目ざめた人は）托鉢のためにそこへ赴いたのである。

（マガダ王）ビンピサーラは高殿の上に進み出てかれを見た。相好にみちた（目ざめた人）を見て（侍臣に）このことを告げた、――

「汝ら、この人を見よ。美しく、大きく、清らかで、行いも具わり、眼の前を見るだけである。かれは眼を下に向けて気をつけている。この人は賤しい家の出身ではないようだ。王の使者どもよ。走り追え。この修行者はどこへ行くのだろう。」と。』

「すぐれた相好にみちた」という点では、この最古の詩句といえども、すでにゴータマ・ブッダを神化・理想化する方向に進んでいたことがわかる。またゴータマが「眼を下に向けて気をつけている」というのは、当時の出家遍歴行者の作法にしたがっているのである。かれらは路上の虫けらをさきも踏み殺さないように道路の上を注視しながら気をつけて歩かなければならない。バラモン教の法典もジャイナ教の戒律もともに規定しているところである。『生物を完全に保護するためには日も夜も常に、身体に苦痛ありとも、地上を精査しつつ巡行すべきである。』

『スッタニパータ』はさらにつづけていう。

『派遣された王の使者どもは、かれのあとを追って行った、――「この修行者はどこへ行くのだろう。かれはどこに住んでいるのだろう。」と。

かれは、諸々の感官を制し、よくまもり、正しく自覚し、気をつけながら、家ごとに食を乞うて、その鉢を速かにみたした。

聖者は托鉢を終えて、その都市の外に出て、パングヴァ山に赴いた。――かれはそこに住んでいるのであろう。

（ゴータマ・ブッダがみずからの）住処に近づいたのを見て、そこで諸々の使者はかれに近づいた。そうして一人の使者は（王城に）もどって、王に報告した、――

「大王よ、この修行者はパングヴァ山の前の方の山窟の中に、虎や牡牛のように、また獅子のように坐しています。」と。

使者のことばを聞きおわるや、そのクシャトリヤ（＝ビンビサーラ王）は莊麗な車に乗って、急いでパンダヴァに赴いた。

かのクシャトリヤは、車に乗って行けるところまで車を駆り、車から下りて、徒歩で赴いて、かれに近づいて坐した。』

「車で行けるところまで車で行き、あとは徒歩で登って行った」というのは、今日でも王舎城の周囲の山々についてそのままあてはまることである。

『王は坐して、それから挨拶のことばを喜び交わした。

挨拶のことばを交わしたあとで、このことを語った、――

「あなたは若くて青春に富み、これから人生の始まる若者です。容姿も端麗で、生れ貴いクシャトリヤ（王族）のようだ。

象の群れを先頭とする精鋭な軍隊を整えて、わたしはあなたに財を与えよう。それを享受なさい。わたしはあなたの生れを問う。これを告げよ。」

（釈尊いわく）、「王よ。あちらの雪山（＝ヒマラーヤ）の中腹に、一つの民族がいます。昔からコーサラ国の住民であり、富と勇気を具えています。

姓に関しては<<太陽の裔>>といい、種族に関しては<<サーキヤ族>>（Sākiya 釈迦族）といいます。王よ。わたしはその家から出家したのです。欲望をかなえるためではありません。

諸々の欲望には患いのあることを見て、また出離は安穩であると見て、つとめはげむために進みましょう。わたくしの心はこれを楽しんでいるのです。」と。』

ここに描かれているゴータマは、詩の文句ならびに註釈の文から見ると、成道以前の釈尊であるらしい。

ここでさとりを開く前のゴータマが問題とされているならば、かれをボーディサッタと呼ばないで、ブッダと呼んでいることは、矛盾しているように思われる。恐らくここではブッダとは単に「めざました人」というほどの意味しかなかったのであろう。それは真理に向かう人でもあり得る。リス・デヴィッツは、これはキリスト教でいう「回心せる人」(converted) に相当する

という。まだ初期においてはボーディサッタ（仏たるべき人）をブッダから峻別していなかったのであろう。総じて最初期の仏教ならびに当時の諸宗教においては<<ブッダ>>とは特別な偉い人を意味するのではなくて、修行者一般の呼び名であった。それがここにも反映しているのである。

ところでビンビサーラ王の申し出は注目すべきである。かれはシャカ族の王子に軍隊と財力とを提供して後援することを申し出ている。（象軍は当時最も有力な武力であった。のちにギリシア人の侵入軍を撃退し得たのも象軍であった）何故か？ 当時マガダ国はコーサラ国と競争相手の関係にあった。ただし、競争相手ではあったけれども政略的には結びついていて、和平をたもとうという努力のなされたことも事実である。政略結婚はその適例である。コーサラ国王パセーナディ王の妹はマガダ国のビンビサーラ王の妃となり「コーサラよりの王妃」（Kosalā devī）と呼ばれていた。そうしてその持参の引出物としてカーシー国（ベナレス）がコーサラ国からマガダ国に与えられたのである。しかし政略結婚も両国間の緊張を完全に解消することはできなかった。マガダ国の立場から者えると、コーサラ国を倒すには、コーサラ国の従属国であるシャカ族の国と同盟を結んでそれに軍事的経済的援助を与え、南と北とからコーサラ国を挟撃すればよい。ビンビサーラ王がこのような申し出をしたのは当然である。

ところがゴータマはこの申し出を拒絶した。かれは世俗の世界を出て、出家修行者となっていたからである。いかなる説得もかれの決心を翻えさせることができなかった。

『四分律』の中の所伝になると、潤色がさらに進んでいる。王は象に乗って釈尊に会いに出かけ、釈尊に向かって、『汝は大王となるべし。我れ今国を挙げて一切の所有、およびこの宝冠を脱して相与へむ。王位に居りて浄化すべし。我れ当さに臣となるべし。』と申し出る。これに対して釈尊は『我れ轉輪王の位を捨てて出家学道す。豈に辺国の王位を貧りて俗に廻るべむや。』と威張っている。ここでは歴史的事実からは大分隔って来た。

〈注〉

- (1) 『大バリニッパーナ経』にはアジャータシャトル王がヴァッジ族にそなえてパータリ村(Pāṭaligāma)に城を築かせた。都市としてのパータリプトラ(別名 Kusu-mapura) はアジャータシャトル王の子である Udāyin または Udāyibhadda の建設したものであるということをジャイナ教の典籍 (*Parīṣiṣṭaparvan*. ed. by Jacobi, VI. 34; 175-180) およびヒンズー教の聖典 (*Gārgī-Saṃhitā*; Kern: *Bṛhat-Saṃhitā*, 36 および *Vāyu-Purāṇa*) が伝えているが、後者によると、かれの治世の第四年においてであるという (H. Raychaudhuri: *Political History of India*, 6th ed. p. 217)。
- (2) puruttama, *Therag.* 622.
- (3) *Vinaya*, Mahāvagga I, v. 405 f.
- (4) Pabbajjā-sutta. (「出家経」と訳し得る)。(Sn. 405 f.) この部分はまた *Mahāvastu* (ed. Senart, II, p. 198) にも出ているのでその比較研究を Ernst Windisch が発表している (*Buddha und Māra*, S. 245-250)。ほぼ同じような内容が『四分律』第31巻、受戒毘度(大正蔵, 22巻, 779-780ページ), 『有部毘奈耶破僧事』第4巻(大正蔵, 第24巻 118-119ページ)にも出ている。『五分律』第15巻(大正蔵, 22巻 102ページ中一下)にも短く言及されている。なおこの部分はジャイナ聖典 *Utt.* 20 と対比して研究する必要がある。

第二節 弟子たちの出会い

〔1〕 サーリプッタ

サーリプッタ (Sāriputta. サンスクリットでは Śāriputra. 「舍利子」「舍利弗」「鶖鷲子」と訳される)。別名をウパティッサという。

マガダ国の首都である王舎城の北のバラモンの家に生まれた。

最初に懐疑論者であるサンジャヤ・ペーラッティプッタ (Saṃjaya Belatṭhiputta) の弟子となり、徒衆百人を率いていたが、マハー・モッガラーナ及びその徒衆 250 人とともに釈尊に帰依して、仏弟子となった。

まもなく高弟に数えられ、智慧第一と称せられた。

サーリプッタは十大弟子のうちでも第一に挙げられる人で、〈教えを伝え

る將軍〉とたたえられた。ブッダの入滅に先立って死んだ。モッガラーナとならんでブッダの上足の二大弟子の一人である。

サーリプッタとモッガラーナとによって、思想史的に非常に重要な一つの事件が起こった。ゴータマ・ブッダが教化活動をしていたときに、王舎城にサンジャヤ (Saṃjaya) というバラモンが住んでいた。かれは 250 人のバラモンのなかまをつれていたという。サーリプッタ (Sāriputta 舍利弗) とモッガラーナ (Moggallāna 目犍連) の 2 人はサンジャヤに従って修行していた。⁽¹⁾

ときにサーリプッタはアッサジ (Assaji) ・ピク [—通常五ピクの 1 人と解せられている—] が托鉢のため王舎城に入って来たそのすがたに打たれた。『誰を師としているのか? 誰の法を楽しんでいるのか?』と尋ねたところ、アッサジは自分は釈尊の弟子であると答え、次の詩句を唱えた。

『諸々の事物は原因より生ずる。

如来はその原因を説きたもう。

諸々の事物の消滅をもまた

大なる修行者はかくのごとく説きたもう。』⁽²⁾

そこでサーリプッタは「法の眼」を開いたという。ありとあらゆるものは多くの原因にもとづいて成立している。因縁によって生ずるものなのである。それ自身によって成立しているものは何もあり得ない、というのである。ここで或る漢訳には「無有主」⁽³⁾とか「無主」⁽⁴⁾とかいうことばを付加している。「主たること(有ること)無し」とよむべきで、いかなるものもそれ自身が自体に対して主たること無し、という意味であろう。この詩句の趣旨として漢訳者はこういう意義をよみとったのである。

この伝説はかなり歴史的な信憑性があると思われる。そのわけはジャイナ教の聖典の中に仏弟子サーリプッタのことが伝えられているが、サーリプッタは

『種々なる状態の生滅に関しては全知者 (=ブッダ) によってことばが語られた。』⁽⁵⁾

と述べたというのに対応する。すなわちサーリプッタがアッサジ・ビクから教えられた趣意を説いていたので、ジャイナ教徒がその趣意をまとめて、このように伝えたのであろう。

ついでモッガッラーナも同様にアッサジ・ビクから教えられた。そこでサーリプッタとモッガッラーナの2人はサンジャヤの弟子である250人のバラモンを引きつけて釈尊のいます竹林に赴いて弟子となった。サンジャヤは痛憤したのであろう。「口から熱血を吐いた。」という。

そこでマガダ国の良家の子らは、釈尊のもとに赴いて出家した。人々は眩き憤り^{そし}毀った、『修行者ゴータマが来て子を奪う。夫を奪う。家を断絶せしめる。かれはすでに1,000人の結髪のバラモンを出家せしめた。いまサンジャヤの250人のバラモンどもを出家せしめた。今また誰を誘うのか?』と。

これに対して釈尊は答えた、『ビクらよ、この声は久しくはつづかないだろう。唯だ7日間のみつづき、7日を過ぎては消滅するであらう。』はたして非難の声は7日ののちには消滅した⁽⁶⁾という。

以上の筋がほぼ歴史的事実として認められると思われる。参考のために以下に、パーリ文『律蔵』の中の叙述を翻訳して紹介しておこう。(サンスクリット文『四衆経』と共通の部分はアンダーラインで示すことにする。)⁽⁷⁾

『1. そのころ、王舎城にはサンジャヤという遍歴行者が住んでいた。250人の遍歴行者の大集団といっしょであった。また、そのころ、サーリプッタ(舍利弗)とモッガッラーナ(目犍連)⁽⁸⁾とは遍歴行者サンジャヤのもとで修行を行っていた。かれらは互いに約束をした、—「二人のうち初めに不死に到達した者は、他の一人に知らせよう。」と。

2. ときに尊者アッサジは、朝早く服装をととのえ、鉢と上衣とをもって王舎城に托鉢に入り、往くも帰るも、前を見るのも後を見るのも、屈するものも伸ばすのも端正で、眼を地に着け、作法にかなっていた。遍歴行者サーリプッタは尊者アッサジが王舎城において托鉢を行ないながら、往くも帰るも、前を見るのも後を見るのも、屈するものも伸ばすのも端正で、眼を地に着け、作法にかなっているのを見た。見て、かれはこう思った、「実に

この世に<尊敬すべき人>または<尊敬すべき人たる道を得た人>がいるならば、この人はそれらの修行僧のうちの一人である。では、わたしはこの修行僧に近づいて尋ねてみよう、“友よ。あなたは誰を仰いで出家したのですか?あなたの師は誰ですか?あなたは誰の教えを奉じているのですか?”と。』

3. しかし遍歴行者サーリプッタはこう思った、「今はこの修行僧に聞くべき時ではない。かれは家屋の中に入って托鉢を行なっているから。では、この修行僧の後から離れずについて行こう。これが求道者にとって知られているしかたなのだ。」と。やがて尊者アッサジは王舎城において托鉢を行ない、施された食物を持って帰り、〔食事を終えた。〕

そこで遍歴行者サーリプッタは、尊者アッサジがいるところに近づいて、尊者アッサジと挨拶を交わし、親しみあり礼儀正しいことばを述べて、一隅に立った。一隅に立って遍歴行者サーリプッタは尊者アッサジにこう言った、「友よ。あなたのもろもろの器官は清く澄み、皮膚の色は清らかで、清潔である。あなたは誰を仰いで出家したのですか?あなたの師は誰ですか?あなたは誰の教えを奉じているのですか?」と。

4. 「友よ。シャカ族の家から出家した偉大な修行者であります。わたくしはかの尊者を仰いで出家したのです。わたくしの師はかの尊者であります。またわたくしはかの尊者の教えを奉じているのです。」

「では尊者の師は何を主張し、何を説かれるのですか?」

「友よ。わたくしは新参者で、出家して日浅く、この教えと戒律をいま奉じたばかりです。わたくしはあなたに教えを詳しく示すことはできませんが、しかし簡略に要点をお話ししましょう。」

それで遍歴行者サーリプッタは尊者アッサジにこう言った、

「何はともあれ、友よ、多少なりともお話しください。要点だけを言ってください。わたくしは要点だけを求めるのです。多く述べ立てたって、何になりましょう。」と。

5. そこで尊者アッサジは遍歴行者サーリプッタに次の<法に関する教

え>を語った。

「もろもろの事がらは原因から生じる。

真理の体現者はそれらの原因を説きたもう。

またそれらの止滅をも説かれる。

偉大なる修行者はこのように説きたもう。」⁽⁹⁾

すると、遍歴行者サーリブッタは、この<法に関する教え>を聞いて、塵なく汚れなき真理を見る眼が生じた、—「およそ生起する性あるものは、すべて滅び去る性あるものである」と。

〔そして言った、〕「もしもそれだけが教えであるとしても、それだけで充分である。すでにあなたがたは憂いのない境地に達せられた。その境地は、過去幾多の劫にわたっても見られなかったものです。」と。

6. それから遍歴行者サーリブッタは遍歴行者モッガッラーナのいるところに赴いた。遍歴行者モッガッラーナは遍歴行者サーリブッタが遠くからやってくるのを見た。遍歴行者サーリブッタを見てこう言った。

「友よ。あなたのもろもろの器官は清く澄み、皮膚の色は清らかで、清潔である。あなたは不死を得たのですか？」

「そうです、友よ。不死を得ました。」

7. 「友よ。どのようにしてあなたは不死を得たのですか？」

「友よ。わたしはここで、修行僧アッサジが王舎城において托鉢を行ないながら、往くも帰るも前を見るのも後を見るのも、屈するのもし伸ばすのも端正で、眼を地に着け、作法にかなっているのを見ました。見て、わたしはこう思いました。実にこの世に<尊敬すべき人>または<尊敬すべき人たる道を得た人>がいるならば、この人はこれらの修行僧のうちの一人である。では、わたしはこの修行僧に近づいて尋ねてみよう、「友よ。あなたは誰を仰いで出家したのですか？ あなたの師は誰ですか？ あなたは誰の教えを奉じているのですか？」と。」

8. 「友よ。しかし、わたしはこう思った、今はこの修行僧に聞くべき時ではない。かれは家屋の中に入って托鉢を行なっているから。では、この

修行僧の後から離れずについて行こう。これが求道者にとって知られているしかたなのだ。」と。やがて修行僧アッサジは王舎城において托鉢を行ない、施された食物を持って帰り、「食事を終えた。」そこでわたしは、修行僧アッサジがいるところに近づいて、修行僧アッサジと挨拶を交わし、親しみあり礼儀正しいことばを述べて、一隅に立ちました。わたしは一隅に立って修行僧アッサジにこう言いました、「友よ。あなたのもろもろの器官は清く澄み、皮膚の色は清らかで、清潔である。あなたは誰を仰いで出家したのですか？ あなたの師は誰ですか？ あなたは誰の教えを奉じているのですか？」と。」

9. 「友よ。シャカ族の出身で、シャカ族の家から出家した偉大な修行者であります。わたくしはかの尊師を仰いで出家したのです。わたくしの師はかの尊師であります。またわたくしはかの尊師の教えを奉じているのです。」

「ではあなたの師は何を主張し、何を説かれるのですか？」

「友よ。わたくしは新参者で、出家して日浅く、この教えと戒律をいま奉じたばかりです。わたくしはあなたに教えを詳しく説き示すことはできませんが、しかし簡略に要点をお話しましょう。」

「何はともあれ、友よ、多少なりともお話してください。要点だけを言ってください。わたくしは要点だけを求めるのです。多く述べ立てたって、何になりましょう。」と。

10. そこで修行僧アッサジは次の<法に関する教え>を語りました。

「もろもろの事がらは原因から生じる。

真理の体現者はそれらの原因を説きたもう。

またそれらの止滅をも説かれる。

偉大なる修行者はこのように説きたもう。」と。

すると、遍歴行者モッガッラーナは、この<法に関する教え>を聞いて、塵なく汚れなき真理を見る眼が生じた、—「およそ生起する性あるものは、すべて滅び去る性あるものである。」と。〔そして言った、〕「もし

もこれだけが教えであるとしても、それだけで充分である。すでにあなたがたは憂いのない境地に達せられた。その境地は過去幾多の劫にわたっても見られなかったものです。」と。

〔1・24・1〕 そこで遍歴行者モッガッラーナは、遍歴行者サーリプッタにこう言った。

「友よ。われわれは尊師のもとに行こう。かの尊師をわれらの師としよう。」と。

「友よ。ここにいる250人の遍歴行者たちは、われわれをとりどころとし、われわれを範としてここで生活している。まずかれらにも知らせてかれらの思うとおりにさせよう。」

ついでサーリプッタとモッガッラーナはかれら遍歴行者たちのいるところに赴いて、かれらにこう言った、――

「友らよ。われわれは尊師のもとに行こう。かの尊師をわれらの師としよう。」と。

「われわれは尊者たちをよりどころとし、尊者たちを範としてここで生活しているのです。もしも尊者がたが偉大な修行者のところで修行をなさるのでしたら、われわれもすべて偉大な修行者のところで修行したく存じます。」

2. そこでサーリプッタとモッガッラーナとは遍歴行者サンジャヤがいるところに赴いて、サンジャヤにこう言った。

「友よ。われわれは尊師のもとに行つて、かの尊師をわれわれの師とすることにいたします。」

「友らよ。いけません。行きなされるな。われら皆三人で、この集いを率いて行きましょう。」

再び……ないし……三たびサーリプッタとモッガッラーナは遍歴行者サンジャヤにこう言った、

「友よ。われわれは尊師のもとに行つて、かの尊師をわれわれの師とすることにいたします。」と。

「友らよ。いけません。行きなされるな。われら皆三人で、この集いを率いて行きましょう。」

3. しかしサーリプッタとモッガッラーナとは、かれら250人の遍歴行者を連れて、竹林に赴いた。遍歴行者サンジャヤはそこで口から熱血を吐いた。』

ところが『四分律』⁽¹⁰⁾によると、モッガッラーナが「自分たちは釈尊の弟子になろう」と申し出たのに対してサーリプッタは「そのことをまず弟子たちに知らせ、同意を得なければならない。」という。その文句(『我等先有二百五十弟子。從我所。修梵行。當語彼令知。隨彼意所欲。』)からみると、250人の行者はすでにサーリプッタとモッガッラーナの弟子であったように解することもできる。また『五分律』⁽¹¹⁾によると、そのとき師のサンジャヤはすでに死んでいて、かれの死後250人の弟子を引きついでいたことになっている。⁽¹²⁾他方パーリ文の「口から熱血を吐いた」という表現は、パーリ聖典の中で当時の修行者や宗教家が憤慨したことを叙べた箇所によく出て来る文句である。⁽¹³⁾

『尊師はそのサーリプッタとモッガッラーナとが遠くからやって来るのを見られた。見てから修行僧らに告げられた、「修行僧らよ。ここに二人の友がやって来る。コーリタ(=モッガッラーナ)とウパティッサ(=サーリプッタ)だよ。かれらはわたしの弟子の双壁となり、最上の立派な兩人となるであろう。』と。かれら二人が、深遠な寂知の対象、無上の、生存の素因の消滅においてすでに解脱して、竹林に至ったそのときに、師はかれらについての予言をされたのであった、「ここに二人の友がやって来る。コーリタとウパティッサだよ。かれらはわたしの弟子の双壁となり、最上の立派な兩人となるであろう。』と。

4. それからサーリプッタとモッガッラーナとは、尊師がおられるところに赴いて、尊師の両足に頭をつけて礼し、尊師にこう言った、「尊き方よ。われわれは尊師のもとで出家したく、受戒を得たく存じます。」と。尊師は言った、「来たれ、修行僧らよ、教えはよく説かれた。正しく苦しみを

消滅するために修行を行なえ。」と。これがかれら尊者たちの受戒であった。

5. そのころマガダ国の多くの著名な良家の子らは、つぎつぎと導師のもとに赴いて清らかな修行を行なった。人々はいらだち憤りそした、「修行者ゴータマがやって来て子を奪う。修行者ゴータマがやって来て夫を奪う。修行者ゴータマがやって来て家を断絶せしめる。いまかれは1,000人の結髪の行者を出家せしめた。サンジャヤのこれらの250人の遍歴行者どもを出家させた。マガダ国の多くの著名な良家の子らは、つぎつぎと修行者ゴータマのもとで清らかな修行を行なっている。」と。また〔仏教の〕修行僧らを見ては、次の詩をもって非難した。

「偉大な修行者がマガダ国の山に囲まれた都(＝王舎城)にやって来た。
すでにサンジャヤの徒をすべて引き入れて、今また誰を引き入れるのか？」と。

6. 修行僧らは人々がいらだち憤りそしているのを聞いた。そこでかれら修行僧らは導師にこのことを告げた。

〔これに対して釈尊は答えた。〕

「修行僧らよ、この声は長くはつづくまい。ただ7日間のみつづき、7日を過ぎてのちには消え失せるであろう。それ故に、修行僧らよ、もしも人々がおんみらを

「偉大な修行者がマガダ国の山に囲まれた都にやって来た。

すでにサンジャヤの徒をすべて引き入れて、今また誰を引き入れるのか？」

というこの詩をもって非難したならば、おんみらは次の詩をもって反駁しなさい。

「偉大な英雄・真理の体現者たちは正しいしかたで引き入れる。

正しいしかたで引き入れる知者に対して何を嫉むのか？」と。」

さてそのころ、人々は修行僧らを見ては、次の詩をもって非難した。

「偉大な修行者がマガダ国の山に囲まれた都にやって来た。

すでにサンジャヤの徒をすべて引き入れて、今また誰を引き入れるのか？」

修行僧らは次の詩をもって人々に反駁した。

「偉大な英雄・真理の体現者は正しいしかたで引き入れる。

正しいしかたで引き入れる知者に対して何を嫉むのか？」

人々は「修行者、シャカ族の出身者(＝ブッダ)の徒は正しく引き入れるのであって、よこしまにするのではないそうだ」と知って、この〔非難の〕声はただ7日だけつづいたが、7日を過ぎてのちには消え失せた。⁽¹⁴⁾ サンスクリット本の『四衆経』はここで終わっている。

以上の伝説は歴史的事実にもとづいていると考えられる。そのわけは、ジャイナ教の『聖仙の書』ではサンジャヤという聖仙の教えがサーリブッタの教えの直後に述べられている⁽¹⁵⁾。そうしてその書におけるサンジャヤの教えの中では、形而上学的な論議は殆んどなされず、ただ道徳的に善を實踐することが強調されているから、懐疑論の主張とは矛盾せず、むしろ一致するわけである。

サーリブッタとモッガッラーナとがサンジャヤの徒衆をひきつれて仏教に帰したことは、最初期の仏教にとって重要な一大事件であった。この二人は通常釈尊の十大弟子のうちでも特に有力な二大弟子として伝えられ、サーリブッタは知慧第一、モッガッラーナは神通第一と称せられている。ところでサンジャヤはいわゆる「六師の一人」として有名な懐疑論者であった。マガダ王アジャータサットウは釈尊に向かって、サンジャヤの教えを次のように告げている。⁽¹⁶⁾

『ベーラッタ族のサンジャヤは次のように言った、——「大王よ、もしもあなたが《あの世は存在する》ということについて問うた場合に、わたくしはもしも《あの世は存在する》と考えたのであるならば、《あの世は存在する》とあなたは答えるでしょう。しかしわたくしはそうだとはいえない。そうらしいとも考えない。それとは異なるとも考えない。そうではないとも考えない。そうではないのではない、とも考えない。」

もしもあなたが「あの世は存在しない」ということについて問うた場合に、……

もしもあなたが「あの世は存在し、また存在しない」ということについて問うた場合に、……

もしもあなたが「あの世は存在せず、また存在しないのでもない」ということについて問うた場合に、……

「自然発生の生きものが存在する」「自然発生の生きものは存在しない」「自然発生の生きものは存在した存在しない」「自然発生の生きものは存在せず、また存在しないのでもない」「善業と悪業の果報のあらわれは存在する」「善業と悪業の果報のあらわれは存在しない」「善業と悪業の果報のあらわれは存在した存在しない」「善業と悪業の果報のあらわれは存在せず、また存在しないのでもない」「人格完成者は死後に存在する」「人格完成者は死後に存在しない」「人格完成者は死後に存在した存在しない」「人格完成者は死後に存在せず、また存在しないのでもない」ということについて、もしもあなたがわたくしに問う場合に、もしもわたくしが「人格完成者は死後に存在せず、また存在しないのでもない」と考えたのであるならば、「人格完成者は死後に存在せず、また存在しないのでもない」とあなたに答えるでしょう。しかしわたくしはそうだとはいえない。そうらしいともいえない。それとは異なるともいえない。そうではないともいえない。そうではないのではない、ともいえない。」と。

このように、『ベラッタ族のサンジャヤは、このように、道の人としての実践生活の現に経験される果報を問われても、つねに「言いのがれ」を説いたのです。』

このように判断中止の思想を説いたサンジャヤの弟子全部を引きつれて、サーリプッタとモッガッラーナのゴータマ・ブッダに帰し、しかも進展途上の仏教教団の中核を形成したという事実は、仏教が懐疑論をのり超えて、それにうち勝ったものとして、世にひろがった経過を示している。初期の仏教教団が、形而上学的論議を拒否したことは、一度サンジャヤの立場を通過した

ことを示している。しかし原始仏教の立場は決してそれにとどまらなかった。それを超えて、右のアッサジの詩が示すように、ありとあらゆるものが因縁によって成立するものであると説く積極的な立場を打ち出しているのである。

右の事件は教団の中核が構成されたことを示すものとしても重要である。サーリプッタとモッガッラーナの帰依によって新たに250人が教団に参加した。従来三カッサバの弟子であった者ども1,000人と合わせて、ここに1,250人となった。多くの経典では「仏が1,250人のクビとともにましました」というのが、定型句となっている。するとここで次の4つの重要な歴史的事実をよみとることができる。

- (1) 釈尊在世中の仏教教団の中核を構成していたのは、火の行者たちの仲間から転向した人々と懐疑論者の仲間から転向した人々だが、人数に関しては多かった。いずれも実践的な関心をもっていた人々である。煩瑣な哲学論や形而上学的論議には関心のなかった人々である。最初期の仏教の実践的性格はこの点からも確かめられる。特に『スッタニパータ』のアッタカ篇やパーラーヤナ篇のような最古層に懐疑論的表現の多いのはそのためである。
- (2) 仏教教団としてはいちおう1,250人という数が固定してしまった。その後逐次人数は増大したであろうが、急激に増大することはなかった。つまり教団はいちおうの安定状態に達した。それ以前に教団に参加した人々が固定的な中核であり、それ以後に参加した人々はまとめて考えられることはなかった。
- (3) 人数としてはもと三カッサバの弟子たちであった人々が多かったけれども、教団の指導権は首都王舎城の知識人たち、特にサーリプッタとモッガッラーナたちに移ってしまった。⁽¹⁷⁾のちに指摘するように、仏教教団の代表者は釈尊ではなくてサーリプッタである、とジャイナ教徒たちは考えるに至ったのである。

(4) パーリ文『律蔵』における釈尊伝の記述はいちおうここで終わっている。はなはだ中途半端なような印象を与えるが、サンジャヤの徒の参加によって教団がいちおうの安定状態に達したので、叙述をそこでやめてしまったのであろう。

〔なお王舎城における釈尊の活動は經典の中に数多く散説されているが、いまここでは諸種の律蔵に出て来る一連の叙述に解釈を加えたまでである。〕

〈注〉

(1) *Vinaya*, Mahāvagga I, 23. vol. I, p. 39 f. 律蔵の英訳諸訳のほか H. C. Warren: *Buddhism in Translation*, pp. 87-91. 相当漢訳はすでに(1)註(1)のところに挙げておいたが、そのほか『根本説一切有部毘奈耶出家事』第2巻(大正蔵, 23巻 1026ページ—1028ページ下)参照。

(2) *Vinaya* I, pp. 40; 41. この詩の漢訳は種々の經典に出ている。

『如來說_レ 因縁生法_一、亦說_レ 因縁滅法_一

若法所_レ 因生_一、如來說_レ 是因_一、若法所_レ 因滅_一、

大沙門亦說_レ 此義_一、此是我師說。』

(『四分律』第33巻, 大正蔵, 22巻 798ページ下)。

そのほか『五分律』第16巻(大正蔵, 22巻 110ページ中), 『過去現在因果律』第4巻(大正蔵, 3巻 652ページ中), 『仏本行集経』第48巻(大正蔵, 3巻 876ページ下), 『大智度論』第18巻(大正蔵, 25巻 192ページ中)などにも出ている。しかし『根本説一切有部毘奈耶出家事』第2巻(大正蔵, 23巻 1027ページ中—下), 『南海寄帰伝』第4巻(大正蔵, 54巻 226ページ下)に出ている次の文が、原文には最も近い。

『諸法從_レ 縁起 如來說_レ 是因_一

彼法因縁尽 是大沙門說』

(3) 『五分律』第16巻(大正蔵, 22巻 110ページ中)。

(4) 『過去現在因果経』第4巻(大正蔵, 3巻 652ページ中)。

(5) *savvaṇṇu-bhāsīyā vāṇī nāṇāvāthodayantare* (*Isibhāsīyāṃ* 38. 11)

(6) *Vinaya* I, pp. 39, 44.

(7) サンスクリット本によると、そのときサンジャヤはすでに死んでいたということになっている。 *tena khalu samayena Rājagṛhe Sañjayi-nāma tīrthyāyatanam acirotpannam abhūt teṣāṃ sāsā acirakālagato bhūt.* (S. 372)

(8) サンスクリット本によると、 *teṣāṃ dvau sahāyaku gaṇa-parihārakau gaṇa-parikarṣakāv Upaṭiṣyaś ca Kolitaś ca yau taṃ gaṇaṃ parikarṣataḥ.* (S. 372)

(9) 注(2)参照。

(10) 『四分律』第33巻(大正蔵, 22巻 798ページ下—799ページ中)。

(11) 『五分律』第16巻(大正蔵, 22巻 110ページ中—下)。

(12) 『優波提舍言, 二百五十弟子, 師臨終時囑吾等成就。豈可不告而独去乎。』

(13) 例えばデーヴァダッタに関してもいわれている。(*Vinaya*, Cullavagga, VII, 4. 3. vol. II, p. 200.) 『四分律』(第46巻)の相当箇所には『かれ即ち驚怖して起ち、熱血が面孔(鼻孔)より出ず。』となっている。(大正蔵, 22巻 910ページ上)。

(14) *Catuṣpariṣatsūtraṃ samāptam.* (S. 398.)

(15) *Isibhāsīyāṃ*, 39.

(16) *DN.* II, 32—33. II, p. 58 f. これについては宇井博士『印度哲学研究』第2巻の中に論ぜられているが、筆者も他日別に論ずることにしたい。

(17) 『印度学仏教学研究』第14巻第2号(昭和41年3月) 455—465ページ。なお中村『原始仏教の成立』参照。

ゴータマ・ブッダには多数の弟子があり、かれらには多くの伝説が伝えられている。それらがどこまで歴史的真實を伝えているかは問題である。いまは古い資料にもとづいて、仏弟子の片鱗を伝えることにしよう。

諸々の仏弟子のうちで第一人者と考えられていたのはサーリブッタである。バラモンであるセーラ(Sela)がゴータマにたずねた。

『誰があなたの將軍なのですか? 師の相續者である弟子は誰ですか?』

この転ぜられた法輪を、誰が(あなたに)つづいて転ずるのですか?』

ゴータマは答えた。

『セーラよ。わたたくしが転じた輪、無上の法輪をサーリブッタが転ずる。

かれは完き人(如来)に従って現われた人⁽¹⁾です。』

またジェータ林で説かれたとされている詩句でも、サーリプッタは讃嘆されている。

『実にサーリプッタは知慧と戒律と安らぎとによって究極に達した修行者であり、かれこそ最上の人であろう。』⁽²⁾

またスジマ⁽³⁾という天子（神の子 devaputta）がサーリプッタをほめて世尊に向かって次の詩句を唱えた。

『賢者なりとあまねく知られたサーリプッタは怒ることなく、少欲で、柔善で、みずから制し、師の賞讃をうける仙人である。』

これに対して世尊は次の詩句を唱えたという。

『賢者であるとあまねく知られているサーリプッタは怒ることなく、少欲で、柔善で、みずから制し、専念し、よく制して（死の）時を待つ。』⁽⁴⁾

サーリプッタは特に知慧がすぐれていた。かれは「ことがらの真理（法界）に通達していた」⁽⁵⁾と賞讃されている。またかれをたたえた詩も伝えられている。

『このジェータ林はめでたい。仙人の群れが居住し
法王（＝釈尊）が居住し、われに喜びを生ずる。

行為と明知と法と戒しめと最上の生活と、――

これによって人々は浄められる。姓によるのでもなく、財によるのでもない。

それ故に聡明なる人は、自己の利（attha）を覩じつつ

正しく真理（dhamma）を熟考せよ。そうすればそこで清らかとなる。

サーリプッタは実に知慧によって戒しめによって、また安らぎ（upasama）によって実に彼岸に達した修行僧であり、かくのごとくにして最上者となるであろう。』⁽⁶⁾

かれは、仏教でいう戒しめと心の落ちつきと知慧（一戒定慧の三学一）を具えていた人なのであろう。のみならず、ジャイナ教の聖典である『聖仙のことば』（*Isibhāsiyāim*）によると、いわゆる仏教は釈尊の教えとしてではなくて、サーリプッタの教えとして伝えられていた。釈尊は少しも言及され

ないで、サーリプッタのみが指導者として伝えられていたのである。⁽⁸⁾

サーリプッタはもともとウパティッサ（Upatissa）という名をもっていたが、かれは諸々の仏弟子のうちで知慧第一と称せられ樹下で禪思していた。⁽⁹⁾かれは聖（ariya）なる沈黙（tuṇhībāva）を修していたのである。かれは神通に熟達し神呪を語る人（mantabhānin）⁽¹⁰⁾であった。恐らく神呪を唱えることは不思議な力があり、それによって神通を助けると考えていたであろう。かれは他の修行僧と同様に剃髪して、重衣（saṃghāṭi）をまとっていた。⁽¹¹⁾こういうわけでかれはのちには「釈尊の実子、法嗣」⁽¹²⁾であるときえ讃嘆されるに至ったのである。しかしかれは、実際問題として釈尊の後継者として教団に君臨したわけではない。教団の首長という観念は仏教には現われなかった。西洋の法王に対応するものは仏教には存在しなかったのである。

<脚注>

- (1) *Sn.* 556—557. Cf. Sāriputto Tāthagatena anuttaraṃ dhammacakkaṃ pavattitaṃ samma-d'eva anupavattehi. *AN.* III, p. 149.; *MN.* III, p. 29.
- (2) *SN.* I, p. 43 G.; 55G; II, p. 277G.
- (3) Susima.
- (4) *SN.* I, p. 65G.
- (5) sā hi……Sāriputtassa dhammādhātu suppaṭividdhā. (*SN.* XII, 32, 47. vol. II, p. 56) 『舎梨子比丘深達=法界-故。』（『中阿含經』第5卷（23）、智經、大正藏、1卷452ページ中。）
- (6) *MN.* III, p. 262.
- (7) サーリプッタについてはなお、『六条学報』1912年1月、76ページ以下参照。
- (8) 拙著「サーリプッタに代表された最初期の仏教」（『印度学仏教学研究』第14巻第2号、昭和41年。）本書379ページ以下。
- (9) *Therag.* 998.
- (10) *Therag.* 999.
- (11) *Therag.* 1183.
- (12) *Therag.* 1006, 1007. Cf. *Therag.* 2.

(13) *Therag.* 998.

(14) *Sāriputtaṃ eva taṃ sammā vadamāno vadeyya: Bhagavato putto oraso mukhato jāto dhammajo dhammanimmito dhammadāyādo no āmisadāyādo ti. MN. III, p. 29.*

サーリプッタの生活および思想を『長老の詩』第981詩以下においては、次のように伝えている。

⁽¹⁾ 981 正しく行ない、思念している人のようによく気をつけていて、正しく意思して行ない、怠らず、内に反省することを楽しみ、みずからよく心の安定をえ、ただ独りいて、そして満足している者、——かれを人々は<修行者>と呼ぶ。

⁽²⁾ 982 水分ある食物も、乾いた食物も、食べるときは、過度に飽食してはならない。修行者は腹をみたくこと無くして、適量を食べ、よく気をつけて、遍歴せよ。

983 四くちか、五くちの食物を食べないで、水を飲むがよい。〔修行に〕もっぱら励む修行者にとっては、〔これだけで〕安楽に住するに足る。

984 この目的に適し、着るにふさわしい衣服を受けるならば、〔修行に〕もっぱら励む修行者にとっては、〔これだけで〕安楽に住するに足る。

⁽³⁾ 985 結跏趺坐しているときに、膝にまで雨が降らなければ、〔修行に〕もっぱら励む修行者にとっては、〔これだけで〕安楽に住するに足る。

986 楽しみを苦しみと見、苦しみを矢と見、両者の中間にみずからとどまらないならば、かれは、この世においてそもそも、何にかかざらうであろうか？

987 悪い欲望をいだき、怠惰で、元気が無く、学ぶこと少なく、他人を尊敬しないような人が決してわたくしにはかかざらけませんように。——その人はこの世において、そもそも、何にかかざらうでしょうか？

988 ひろい学識があり、聡明であり、もろもろの戒行によく専心し、そして、心の平静をうることに専念する者——〔かれこそ、わが〕頭上に

立て。

⁽⁴⁾ 989 妄想にふけり、妄想を喜びとする獣〔のごとき者〕、——かれは、無上の安らぎ・安穩⁽⁵⁾を獲得するに至らない。

990 妄想を捨てて、妄想のない道を楽しむ者、かれは、無上の安らぎ・安穩を獲得するに至る。

⁽⁶⁾ 991 村でも、林でも、低地でも、平地でも、聖者たちの住む土地は、楽しい。

⁽⁷⁾ 992 人のいない林は楽しい。むさぼりを離れた人々は、世人が楽しまないい処において楽しむであろう。かれらは、快楽を求めないからである。

⁽⁸⁾ 993 (おのが) 罪過⁽⁸⁾を指摘し、あやまちを告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢い人につき従え——隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善いことがあり、悪いことはない。

⁽⁹⁾ 994 (他人を) 訓戒せよ、教えさとせ、宜しくないことから(他人を)遠ざけよ。そうすれば、その人は善人に愛され、悪人からは疎まれる。

⁽¹⁰⁾ 995 〔真理を見る〕眼ある尊き師ブッダは、他の一人のひとのために、真理の教えを説かれた。教えが説かれているとき、〔道を〕求めるわたしは、耳をそば立てた。

996, 997 わたしが聞いたことは、空しくはなかった。わたしは、束縛をのがれ、煩惱のけがれのない者となった。実に、わたしの誓願としたところのものは、過去世の生活を知る〔通力〕・すぐれた透視〔力〕・他人の心を読みとる〔通力〕・死と生を知る〔通力〕・聴力を浄めること⁽¹¹⁾のためではなかった。

998 頭を剃り、重衣をまとった知慧第一の長老ウパティッサ (=サーリプッタ) は、樹の根もとにとどまって、瞑想する。

⁽¹²⁾ 999 論理的思考をなさない境地⁽¹³⁾に到達した、正しくさとった人の弟子は、⁽¹⁴⁾つねに貴き沈黙を具現している。

⁽¹⁵⁾ 1000 岩山が確固として不動であるように、そのように、修行者は迷妄を滅ぼしているから、山のごとく、おののかない。

- ⁽¹⁶⁾ 1001 汚点なく、つねに清浄を求める人には、毛の先ほどの悪も、雲のような大きに見える。
- ⁽¹⁷⁾ 1002 わたしは、死を喜ばず、生を喜ばず、気をつけて、心がけながら、この身を捨てよう。
- ⁽¹⁸⁾ 1003 わたしは、死を喜ばず、生を喜ばず、この身体を捨てるであろう。——備われた人が賃金をもらうのを待つように。
- 1004 二つの極端のどちらによっても、これは死のみである。(この生涯の)先にも後にも不死は無い。⁽¹⁹⁾ 道を実践せよ。滅びるなかれ。瞬時も空しく過すな。
- ⁽²⁰⁾ 1005 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過すな。時を空しく過した人々は地獄に墮ちて、苦しみ悩む。
- ⁽²¹⁾ 1006 かれは、こころ静かに、やすまりし、ほど良く語り、⁽²²⁾そわそわせず、⁽²³⁾もろもろの悪しき性質を吹き払う。——風が樹の葉を吹き払うように。
- 1007 こころ静かに、やすまり、ほど良く語り、そわそわせず、もろもろの悪しき性質を吹き捨てよ。——風が樹の葉を吹き捨てるように。
- 1008 こころ静かに、煩勞なく、心が清く澄んで、けがれなく、性行が良く、聰明であり、苦しみを滅ぼす者であれ。
- ⁽²⁴⁾ 1009 こういうわけで、或在家の人々をも、さらに出家者をさえも、信頼してはならない。
もとは善良であっても、のちに不良となる者どもがいる。また、もとは不良であっても、のちに善良となる人々がいる。
- ⁽²⁵⁾ 1010 官能的欲望と害心ともうさとざわつきと疑惑——、これらの五つは、修行者にとって、心の汚れである。
- 1011 尊敬をうけていても、また尊敬されていなくても、どちらであろうとも、つとめはげんで生活する者は、精神の安定がゆらぐことがない——
- 1012 冥想し、堅忍不拔で、諸の見解を微細なところまで洞察し、執着を

- 滅すのを楽しんでいる人、——かれを〈立派な人〉と呼ぶ。
- ⁽²⁶⁾ 1013 大海、大地、山、さらに風も、師〔ブッダ〕のすぐれた解説を説くのに、譬えとするにふさわしくない。
- 1014 大いなる智慧あり、心の安らぎに達し、〔ブッダに〕従って〔真理の教えの〕輪を廻す長老は、地と水と火に等しく、染まらず、汚されない。
- 1015 智慧の完成に達し、大いなる識別力ある、偉大な聖者は、愚者のようであって愚者ではない。つねに安らぎをえて歩む。
- ⁽²⁷⁾ 1016 わたしは、師〔ブッダ〕に仕えました。ブッダの教えを実行しました。重い荷をおろしました。迷いの生存にみちびくものを根たやしにしました。
- ⁽²⁸⁾ 1017 怠ることなく、つとめ励めよ。これが、わたしの教えさとしてである。さあ、わたしは、⁽²⁹⁾円かな安らぎに入ろう。わたしは、あらゆることからについて解脱している。

<注>

- (1) 後半は『ダンマバダ』362の詩句の後半と同じ。『ブッダのことば』647の詩句を参照。
- (2) 982, 983, 中村元・早島鏡正共訳『ミリンダ王の問い』Ⅲ, 288ページの詩句と同じ。
- (3) 前掲書, 207ページの詩句と同じ。
- (4) Papanca. これを Norman は “the diversified world” と訳すが、それはヴェーダーンタの見解をもち込みすぎたのであり、むしろ仏教一般で用いられる語義に従うべきであろう。
漢訳仏典では普通 “戲論” と訳す。
- (5) yogakkhama (=yogakṣema.) ノーマンは “rest-from-exertion” と訳すが、はたしてそのように解釈されたかどうか疑問である。チベット訳では yoga と ksema と切って解するから、解釈は全然異なる。もと『リグ・ヴェーダ』では “幸福” “福

社” “安寧”の意味に用いられていたが、それを仏教が採用したのである。漢訳仏教では“安穩”と訳するのが普通である。

- (6) =『ダンマパダ』98の詩句。
 (7) =『ダンマパダ』99の詩句。
 (8) =『ダンマパダ』76の詩句。
 (9) =『ダンマパダ』77の詩句。
 (10) これ以下 1005の詩句までは、サーリプッタ（舍利弗）長老自身について詠んでいる。
 (11) 後代の体系化された術語である六通のうちで、宿命通、天眼通、他心通、天耳通が共通である。まだ六通の体系は成立していなかったのである。
 (12) =650。
 (13) 論理的思考をなさない……。 avitakka. 後代のアビダルマ教学において vitarka（尋）と vicāra（伺）とを対立させて考える見解をもち込む必要はないであろう。
 (14) tāvade. ノーマンは “straightway” と訳すが、PTS. 辞典により “for all times” と解することにした。
 (15) =651。
 (16) =652。
 (17) 607の詩句と似ている。
 (18) =606。
 (19) 瞬時, Khana. 他の解釈は, “良い時機” (the opportunity) と解する。瞬時, 瞬時が良い時機であると解することもできるであろう。
 (20) =『ダンマパダ』315の詩句。また「地獄におちて」云々を除けば, 同653の詩句と同じ。
 (21) これ以下1008までの三つの詩句は, マハーコッティカ長老の徳をたたえる。「ほどよく語り, そわそわせず」の句は, 『ダンマパダ』363, 『ブッダのことば』850, 『テーリー・ガーター』281の詩句に出る。
 (22) ほどよく語り, mantabhāṇī 多くの訳には “神呪を語り” となっているが, 原始仏教の修行生活にはそぐわない。“speaking in moderation” (Norman) という解釈に従う。
 (23) そわそわせず, anuddhata. ノーマンは “not conceited” と訳すが, 恐らく語源

から解釈したのであろう。しかし仏教心理学の “auddhatya” (掉挙, じょうこ) の否定形と解したほうが, よく適合する。

- (24) これ以下 1012までの四つの詩句は, 教団破壊を試みたデーヴァダッタに組したヴァッジ人たちに関してうたわれたもの。
 (25) 74の詩句に似ている。
 (26) これ以下1017までの詩句は, ブッダについてうたう。
 (27) =604, 792, 891, 918。
 (28) =658。

[2] アーナンダ

アーナンダ (Ānanda 「阿難」, 「阿難陀」と音写する) は釈尊の従弟であった。

出家して間もなく釈尊の常隨の弟子となったため, 「多聞第一」とよばれた。経典の第一結集の際には, 選ばれて経を誦出した。

もしもこの伝説が真実であるならば, そのときまとめられた経典は, 釈尊の晩年の教えを多く伝えていたことになる。これに対してサーリプッタが受けたような釈尊壮年時代の, 初期の教えは, どうなったのであろうか?

アーナンダは釈尊の生前にはさとりを開くことができず, 入滅の前には悲驚慟哭して, アヌルッダから戒められている。入滅後に, マハーカッサパの教誡を受けてさとりを開いたという。

侍者アーナンダは釈尊の晩年にとって非常に重要であった。『世尊にとってはアーナンダという修行僧が侍者であって, 最上の侍者であった。』⁽¹⁾ アーナンダは 25年間友愛のこもった身・口・意の行いを以て世尊に侍したという。⁽²⁾ ブッダの晩年に25年間, 侍者として良く仕えたのである。この記述からみると, アーナンダは釈尊のなくなるより25年前に出家したと解し得るであろう。かれも「ゴータマ」と呼ばれている。⁽³⁾ かれは釈尊の従弟であったと伝えられているが, その姓もゴータマであったのであろう。伝説によると, ブッダ入滅の折, 阿羅漢のさとりを得ていなかったで, マハーカッサパ長老らに励

まされて、阿羅漢となり、仏典結集の会議に参加することができた。また伝説によると、アーナンダはマガダ国のアジャータサットゥ王とヴァイシャーリーのリッチャヴィ族と両方から帰依信頼され、自分はどちらへついてよいか困ったので、『この身の半分をマガダ国に与え、半分をヴァイシャーリー族に与えよう』⁽⁴⁾といて死んだ。そこで、アジャータサットゥ王とリッチャヴィ族とはそれぞれかれの遺骨の半分を受けて供養した。故にアーナンダのストゥーパはマガダ国の首都王舎城とヴァイシャーリーにあるのだという。この伝説によってみても、初期の仏教教団を政治的・経済的に支持していた二つの大きな社会的勢力は、マガダ国の王室と、ヴァイシャーリーの富裕なリッチャヴィ族とであったらしい。現在王舎城の外廓の山にもアーナンダのストゥーパと称するものが存するが、空樊はマトゥラーにもアーナンダのストゥーパのあったことを伝えている。⁽⁵⁾アーナンダは、とかく子供っぽくて、わがまま勝手な行いがあり、大カッサパなどから咎められたことがある。⁽⁶⁾アーナンダは後代に次第に増加した進歩主義者または自由主義者の側の人であった。⁽⁷⁾

釈尊は個人としては謙虚な人柄であったと考えられる。それはアーナンダに対する教えのうちにも見られるところである。最後の旅路において、ゴータマブッダは商業都市ヴァイシャーリーの近くで〈竹林の村〉に赴いて、そこにとどまった。その時はインド特有の雨季が迫って来たらしい。ここでかれは修行僧らに告げた。

『行け、汝ら修行僧よ。ヴェーサーリーのあたりで、友人を頼り、知人を頼り、親友を頼って雨季の定住（雨定居）に入れ。わたしもまたこの〈竹林の村〉で雨季の定住に入ろう。』

修行僧らも釈尊もそのとおりに実行した、という。

恐らく、この〈竹林の村〉にも、また近くの商業都市ヴァイシャーリーにも、多くの修行者が雨季の間共住し得るような寺院や僧院はまだ建てられていなかったの、分散せざるを得なかったのであろう。そうして食糧難をのりこえるためにも分散した方が有利であった。釈尊はこの〈竹林の村〉にとど

まったのであるが、随従した人としてはアーナンダの姿のみがはっきりと記されている。恐らく、かれにつき従った人はあまりいなかったであろう。

『ここで尊師が雨季の定住に入られたとき、恐ろしい病いが生じ、死ぬほどの激痛が起こった。』しかし釈尊は、禪定に入ってこの苦痛を堪え忍んだ。

アーナンダは釈尊に近づき、最後の説法を懇請する。釈尊は説く。そのことばは痛切である。

『アーナンダよ。修行僧らはわたくしに何を待望するのであるか？ わたくしは内外の区別なしに（悉く）法を説いた。完き人の教えには、何ものかを弟子に隠すような教師の握拳は、存在しない。「わたくしは修行僧のなかまを導くであろう」とか、あるいは「修行僧のなかまはわたくしに頼っている」とこのように思う者こそ、修行僧のつどいに関して何ごとかを語るであろう。しかし向上につとめた人は「わたくしは修行僧のなかまを導くであろう」とか、あるいは「修行僧のなかまはわれに頼っている」とか思うことがない。向上につとめた人は修行僧のつどいに関して何を語るであろうか。

アーナンダよ。わたしはもう古い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達して、わが齢は八十となった。譬えば古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いて行くように、わたしの車体も革紐の助けによってもっているのだ。

しかし、向上につとめた人が一切の相をこころにとどめることなく一々の感受を滅したことによって、相のない心の統一に入るとどまるとき、そのとき、かれの身体は健全なのである。それ故に、この世で自らを鳥とし、自らをよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。』

故にゴータマ・ブッダは、右の文から見て明らかなように、自分が教団の指導者であるということをみずから否定している。たよるべきものは、めいめいの自己であり、それはまた普遍的な法に合致すべきものであるというのである。

アーナンダに関する詳しい詩句が『長老の詩』(1018~1050)に伝えられている。

1018 賢者は、二枚舌を使う人、怒る人、けちな人、そして〔他人の〕不幸を喜ぶ人と友達になってはならない。悪人とつき合うことは、わざわいである。

1019 賢者は、実に、信心ある人、智慧のある好ましい人、学識のある人と友達となるべきである。立派な人とつき合うことは、さいわいである。

⁽⁸⁾ 1020 見よ、粉飾された形体を！(それは)傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。

⁽⁹⁾ 1021 学識あり、みごとに談論し、ブッダの侍者であるゴータマ(=アーナンダ)は、〔重き〕荷をおろし、束縛を離れ、臥床ふしどについている。

1022 かれは、煩惱のけがれを滅ぼし、束縛を離れ、執着を超え、よく心の安らぎをえ、生死の彼岸に達し、最後の身体を保っている。

⁽¹⁰⁾ 1023 太陽の喬たけであるブッダの〔説いた〕もろもろの教えの基礎となっている、かのニルヴァーナに至る道の上に、このゴータマ(=アーナンダ)は立っている。

1024 わたしは、ブッダから八万二千〔の教え〕を受けました。また修行者〔たち〕から二千〔の教え〕を受けました。——こういうわけで八万四千の教えが行われているのです。

⁽¹¹⁾ 1025 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの知慧は増えない

1026 学識ある者が、その学識を誇ることによって、学識の劣った者を軽んずるのは、燈火をもっている盲人のようなものだとなわたくしには思われる。

1027 学識ある者に親しみ仕えよ。そして、学んだことを失ってはならない。それが、清らかな行ないの根本である。それ故に、真理の教えを

たもつ者であれ。

1028 一を聞いて百を知り、⁽¹²⁾ 意義を知り、ことばや語句に精通する者は、よく会得し、そして意義を探求する。

1029 忍受することによって〔なそうという〕欲求が生じる。努力してこれを測定する。内によく心の安定した人は、時に応じて、奮励する。

1030 学識あり、真理の教えをたもち、智慧あり、真理を理解しようと願うブッダの弟子、——このような人に親しみ仕えよ。

1031 学識あり、真理の教えをたもつ人は、大いなる仙人の〔宝の〕蔵を守護する人、全世界の人々の眼まなこ、——〔この〕学識ある者は、尊敬されるべきである。

⁽¹³⁾ 1032 真理の教えを喜び、真理の教えを楽しみ、真理の教えをくりかえし思索し、真理の教えをくりかえし思いつづけている修行者は、正しい真理の教えから退転しない。

1033 身体を〔動かすのを〕惜しんで、もの倦く思い、ただ肉体の快楽を食るものには、どこから〈道の人〉こころよの快さが起るであろうか？——〔身体が刻々に〕衰えて行くのに奮起もしないで。

⁽¹⁴⁾ 1034 四方、さだかに見えず、教えもまた、わたしにとって明らかでない。善き友がこの世を去って、暗黒〔に覆われたよう〕に思われる。

⁽¹⁵⁾ 1035 友が世を去り、師も逝去されてしまった者にとっては、〔もはや〕〈身体に関して心がけること〉ほどの〔良き〕友は存在しない。

1036 むかしの人々は、すでに去り、新しい人々は、わたしとなじまない。今日、わたしは、ただ独り思いに耽る。——雨のために巣ごもりする鳥のように。

⁽¹⁶⁾ 1037 〔わたしに〕会おうと、諸国から来た多くの人々、〔それらの〕教えを聞こうとする人々をさえぎってはならない。かれらを、わたしに会わせるがよい。まさに、その時である。

1038 〔師ブッダを〕見ようと、ひろく諸国から来た人々に、師はそれを許し、眼あるかた(ブッダ)はそれをさえぎらなかった。

- ⁽¹⁷⁾
1039 二十五年の間、わたしは、学ぶ者であったが、気をつけていて、官欲の欲望の想いは起らなかった。真理の教えの美德を見よ。
- 1040 二十五年の間、わたしは、学ぶ者であったが、気をつけていて、いかりの想いは起らなかった。真理の教えの美德を見よ。
- ⁽¹⁸⁾
1041 二十五年のあいだ、わたしは慈愛にあふれた身体の行ないによって尊き師のおそばに仕えた。影が形を離れないようなものであった。
- 1042 二十五年のあいだ、わたしは慈愛にあふれたことばの行ないによって尊き師のおそばに仕えた。——影が形を離れないようなものであった。
- 1043 二十五年のあいだ、わたしは慈愛にあふれたところの行ないによって尊き師のおそばに仕えた。——影が形を離れないようなものであった。
- 1044 ブッダが^{きんりん}経行されているとき、わたしは、その後からつき従って経行した。また、ブッダが教えを説かれているときわたしに智慧が生じた。
- 1045 わたしは、まだなすべきことのある身であり、学習する者であり、まだ心の完成に達しない者であった。それなのに、わたくしを慈しみたもうた師は、^{まど}円かな安らぎに入られた〔亡くなられた〕。
- 1046 あらゆるすぐれた徳性を具えた覚者が、円かな安らぎに入られたとき、〔世の人々に、〕そのとき、恐怖があった。そのとき、身の毛のよだつことがあった。
- ⁽¹⁹⁾
1947 「学識あり、真理の教えをたもち、大いなる仙人の〔宝の〕蔵を守護し、あらゆる世の人々の^{またこ}眼であるアーナンダは、円かな安らぎに入った。
- 1048 学識あり、真理の教えをたもち、大いなる仙人の〔宝の〕蔵を守護し、あらゆる世の人々の^{またこ}眼、闇の中で暗黒をのぞく者。
- 1049 帰趣をたもち、つねに気をつけていて、しっかりとしている仙人であって、正しい真理の教えをたもち、宝石の脈脈である長老アーナン

ダは、…………。

- ⁽²⁰⁾
1050 わたしは、師〔ブッダ〕に仕えました。ブッダの教えを実行しました。重い荷をおろしました。迷いの生存にみちびくものを根だやしにしました。

右の諸詩句から見ると、

- (1) アーナンダはここで「ゴータマ」と呼ばれているから、釈尊と同じゴータマ姓を名乗っていたことが解る。
- (2) かれは、ゴータマ・ブッダに25年間常侍していたことになる。つまりゴータマ・ブッダが55歳のころに侍者となったわけである。出家したのは、それよりも早いかもしれない。

<注>

- (1) *DN.* Ⅱ, p. 52.
- (2) *Therag.* 1041—1043.
- (3) *Therag.* 1021; 1023.
- (4) 『以半功徳法、与摩伽陀王、復以半功徳、与離車毘衆、如是此二人、当正修供養。』(『阿育王経』第7巻、大正蔵、50巻155ページ中—下)。なお『阿育王伝』第4巻(大正蔵、50巻116ページ上)、『高僧法顯伝』(大正蔵、51巻862ページ上)参照。
- (5) 『大唐西域記』第4巻、秣菟羅国の条。
- (6) *SN.* XVI, 11 (vol. Ⅱ, pp. 218—219). 『雜阿含経』第41巻(1142, 1143), (大正蔵、2巻302ページ上—303ページ下)。
- (7) 雲井昭善『印度学仏教学研究』第2巻第1号131ページ以下。
- (8) 『テラガター』769; 『ダンマバダ』147。
- (9) これと1022の詩句は、アーナンダが夜、臥床で阿羅漢のさとりを得た光景を告げている。
- (10) これと1024の詩句は、彼が梵天に答えたもの。
- (11) 『ダンマバダ』152。気まぐれな生活をする男について詠んだもの。
- (12) 一を聞いて百を知り…………。Pubbāparaññū. 原義は“詩句の始めと終りを聞いたならば、ただちにその詩句全体を知ることができる”という意味である。

- (13) =『ダンマパダ』364の詩句。『ブッダのことば』327の詩句を参照。
 (14) サーリブッタ長老の死を聞いて詠んだもの。
 (15) これ以下1046までの詩句は、ブッダの入滅後におけるもの。
 (16) ブッダの遺誡の一つ。
 (17) これ以下1046までの詩句は、ブッダの侍者であったときの心境をよんだもの。
 (18) 形影あい伴うという喩は、『ダンマパダ』2の詩句にも出る。
 (19) これ以下1050までの詩句は、アーナンダ長老の死後、かれを慕う修行者たちがよんだもの。
 (20) =604, 792, 891, 918, 1016。

[3] キサーゴータミー

キサー・ゴータミー尼は、サーヴァッティ市（舍衛城）の貧しい家に生まれ、やせていたから、キサー（=やせた）・ゴータミーの名を得た。嫁して男子を産んだが、死なれ、その亡骸を抱いて「薬よ、薬よ」と町中を歩き廻った。これをあわれんだブッダは「いまだかつて死人を出したことの無い家から、芥子の粒をもらって来なさい」と教えた。これを得ることのできなかつた彼女は、人生の無常を知って出家した。尼僧中、粗衣第一といわれる。

- 213 聖者〔ブッダは〕、世の人々に教えて、善き友と交わることをほめたたえた。善き友に親しむならば、愚者でも、賢者となるであろう。
 214 善人たちに親しむべきである。そのような人たちに親しむ人々の智慧は、増大する。善人たちに親しむならば、かれは、あらゆる苦しみから脱れるであろう。
 215 なんじらは、四つの聖なる真理、すなわち——苦しみと、苦しみの生起と、〔苦しみの〕滅尽と、そして、八つの支分よりなる道とを識知すべきである。
 216 「婦人であることは、苦しみである」と、丈夫をも御する御者〔ブッダ〕は説きたもうた。夫のあることもまた、苦しみである。また、ひとたび、子を産んだ人も〔そのとおりで〕ある。
 217 か弱い身で、みずから首をはねた者もあり、毒を仰いだ者もある。

死児が胎内にあれば、両者（=母子）ともに滅びる。

- 218 わたしは、分娩の時間が近づいたのを知って、歩いて行く途中、わたしの夫が路上に死んでいるのを発見しました。わたしは、わが家に達しないうちに、子どもを産みました。
 219 二人の子どもは死に、夫もまた貧苦のため、路上に死に、母も父も兄弟も同じ火葬の薪で焼かれました。
 220 一族滅び、家貧しき女よ。なんじのすでに受けた苦しきは、限りがない。さらに、なんじには、幾千〔の苦しみの〕生涯がつづくであろう。
 221 さらにまた、わたしは、それを墓場のなかで見ました——子どもの肉が食われているのを。わたしは、一族を失い、夫を失って、世人には嘲笑されながら、不死〔の道〕を体得しました。
 222 わたしは、八つの支分よりなる聖なる道、不死に至る〔道〕を修習しました。わたしは、安らぎを現にさとって、真理の鏡を見ました。
 223 すでに、わたしは、〔煩惱の〕矢を折り、重き荷をおろし、なすべきことをなしおえた。と、キサー・ゴータミー長老尼は、よく解脱した心をもって、この詩句を唱えた。

自分の死児の肉が墓場のなかで獣に食われているのを見た、と言うからには、かの女は貧乏であって、火葬の薪を買うだけの資金もなかったのであろう。死骸を担架にのせて川ぶちまで運び火葬するというのは若干の資力を要したであろう。

[4] イシダーシー

イシダーシー尼は、ヴッジェーニー市の豪商の娘であったが、三度、結婚に失敗し、ジナダッター尼のもとで出家した。かの女のことが、四十の詩句によって伝えられている。

- 400 地上最大の、そして〔パータリーと呼ぶ〕花の名をつけた都城パー

タリブッタにおいて、釈迦族の家に生まれた二人の有徳の尼僧がいた。

401 そのなかの一人をインダーシー、もう一人をボーディーと呼び、かれらは、戒行を具え、瞑想を楽しみ、学識があり、煩惱を除いていた。

402 かれらは托鉢に出かけて帰り、食事をとり終って、鉢を洗い、人気のないところに安坐して、つぎのことを語り合った。――

403 [ボーディー尼]「大姉^{だいし}インダーシーよ、あなたは眉目うるわしく、年もまだふけていない。あなたは、いかなるわざわいを認めて、出離の生活に専念しているのですか？」

404 このように[出離の生活に入って]淋しい場所で専念しているかのインダーシーは、説法に巧みであったが、つぎのことばを語った。――
[インダーシー尼]「ボーディーよ、わたしが出家した次第を聞いてください。」

405 すぐれた都ウッジェーニーにおいて、わたしの父は、徳行の篤い豪商でした。わたしは、その一人娘で、可愛がられ喜ばれ慈しみをうけました。

406 ときに、サーケータに住む名門の人から[遣わされた]仲人^{なこうど}がやってきました。[名門の人とは]多くの財宝ある豪商で、父は、わたしをその人の嫁として与えました。

当時、妻を娶ることを「連れて来る」(āv/ni)⁽¹³⁾と呼んでいた。一般には媒酌結婚が行われていて、ここに記されているように、父が娘を他の家の或る男に「与える」⁽¹⁴⁾のであった。それには結婚の媒介者(varaka)が参与⁽¹⁵⁾していた。当時は売買婚も行われていたらしい。夫のことを「財を以て購いし者」⁽¹⁶⁾(dhanena kito)⁽¹⁷⁾と呼んでいる。

いかなる結婚のしかたを理想とすべきかについては、原始仏教聖典のうちには別に規定されていない。ただ『諸の妻のうちでは童女が最もすぐれている。』⁽¹⁸⁾というから、処女が尊ばれていたことが知られる。

当時、結婚は純然たる私事であり、何らかの公的機関に届出することもなけ

れば、また離婚が裁判による判決によらないで行われたようである。このインダーシー⁽¹⁹⁾という婦人はウッジェーニー市の富商(setthi)の娘であったが、サーケータ市の富商のもとに嫁にやられた。

407 夕と朝には、^{しゅうとめ}姑と^{しゅうと}舅に挨拶のために近づき、教えられたとおりに、頭を[かれらの]足につけて敬礼しました。

408 わたしの夫の姉妹や兄弟や近親のうち、だれか一人を見ても、わたしは、畏れはばかって、座をゆずりました。

409 食物、飲物、かたい食物、それにそこに貯えられているものを、喜んで持ってきて、そうして、[適当な]人に適するものを与えました。

410 時間に遅れることなく起きて、[夫の]住居に行き、入口で手足を洗い、合掌して夫のそばに近づきました。

411 櫛と顔料と眼薬と鏡を持っていき、^{はしため}婢女のごとく、みずから夫を、装飾しました。

412 わたしは、自分で御飯を炊き、自分で食器を洗いました。あたかも、母が一人つ子にたいしてなすように、わたしは、夫にかしづきました。かの女は貞淑に仕えたが、夫の気に入らなかった。

413 このように、貞淑で最善をなし、高ぶらず、早起きで、怠けず、婦徳のそなわったわたしを、夫は憎みました。

『かれ(夫)は(かれの)母と父とに告げていった。「許して下さい。わたくしは出て行きたいのです。わたくしはインダーシーと同じ家の中で一緒に住みたくないのです。』⁽²⁰⁾

「兎よ、そんなことを言いなさんな。インダーシーは賢くて、はきはきしている。早起きで、怠けたりしません。兎よ、何がお前の気に入らないのです？」

「かの女は何もわたくしを害したりしません。しかしわたくしはインダーシーと共に住みたくないのです。ただ嫌いな女はわたくしには用がないのです。許して下さい。わたくしは出て行きたいのです。」

かれのことばを聞いて姑と舅とはわたくしに尋ねた、「お前はどんな

ことをしでかしたのだい。——打ち明けてありのままに言いなさい。」

「わたくしは何も悪いことはしませんでした。(夫を)害ったこともありませんし、(夫の欠点を)算えたこともありません。夫がわたくしを憎んで発するような悪いことばを、どうしてわたくしが口にすることができましようか?」

憂いまどえるかれら(両親)は、その子息の気持にしたがって、苦しみながら、わたくしを(わたくしの)父の家につれもどして、いきました。「われらは(人間のかたちをした)美しの幸福の女神に敗れたのです。」と。』

かの女はつづいて第二、第三の結婚にも失敗した。かの女の告白はつづけられる。

『そこで(父は)次にわたくしを富める第二の家の人に与えました。(第一の)富商がわたくしを得て(支払った)結納金(身代金)の半分をもつて。』

右の話からみても、当時は再婚も必ずしも禁じられていなかったことが知られる。〔ただし、『マヌ法典』9・65によると再婚を禁じている。〕

わたくしは、かれの家にも一カ月住みましたが、やはりかれもまたわたくしを追い返しました。——わたくしは婢女のように勤しみ仕え、罪もなく、戒しめを身にたもっていたのですが。

乞食のために徘徊し、自ら制し(他人を)制する力ある一人の男(修行者)に向って、わたくしの父は言いました、——「あなたはわたくしの女嬬となって下さい、襤褸衣と乞鉢とを捨てなさい。」と。

かれもまた半カ月住みましたが、そこで父に告げました、——「わたくしに襤褸衣と乞鉢と飲む器を返して下さい。もとどおり托鉢乞食の生活がしたいのです。」

436 わたしは、それから死んで、長い間、地獄のなかで煮られました。〔罪の〕報いが熟して、そこから出ると、牡猿の胎に宿りました。

そこでわたくしの父と母とすべての親族一同はかれに言いました。

——「ここであなたのためにしないことがあるでしょうか。あなたのためになすべきことは直ぐに言って下さい。」と。

このように告げられて、かれは語りました。——「わが自己が(自由である状態を)得れば、わたくしはそれだけで充分なのです。わたくしは、インダーシーと共に同じ家に一緒に住みますまい。」と。

かれは追われて去りました。わたくしも独りで思いに耽りました。——「わたくしは許しを得て出て行きましよう、死ぬために。或いは出家しましよう。」と。』

かの女を救ってくれたものは、み仏の教えであった。

『そのとき聖ジナダッター尼は、乞食のために遍歴しつつ、父の家に来られました。(かの尼さまは)戒律をたもち、道を学び、徳を具えた方でした。

かの尼を見るや、起ってかの尼さまのための座席を設けました。坐した尼の両足を礼拝し、食物をささげました。食物と飲料とかむ食物とそこに貯えてあったすべてのものを飽くまですすめて、わたくしは言いました、——「尼さま、わたくしは出家したいと願うのです。」と。』

父は最初には出家に反対したがやがてそれを承認したという。

430 そのとき、父は、わたしに告げて言いました。——

“娘よ、ここで、かの〔ブッダ〕の教えを行ないなさい。食物と飲物をもって、道の人や再生族(＝バラモン)たちを供養しなさい”

431 そこで、わたしは、掌を合わせ泣いて、父に申しました。——

“わたしは、悪業ばかりをしてきました。わたしは、これを滅ぼしましよう”

432 そのとき、父は、わたしに告げて言いました。——

“さとりを得なさい。最高の真理を得なさい。両足のうちの最尊者〔ブッダ〕が実証された安らぎを得なさい”

433 わたしは、母と父と親族一同のすべての者に挨拶して、出家しました。出家して七日目に、わたしは、三種の明知を得ました。

- 434 わたしが自分の〔過去〕七生を知っているのは、その〔明知を得た〕結果であります。あなたにそれを話しましょう。一心にお聞きください。——
- 435 〔その昔〕エーラカカッチャの都において、わたしは、多くの財産ある金工かざらぎでした。若気の至りで、そのわたしは、他人の妻と親しくなりました。
- 437 わたしが生まれて七日目に、猿群の長である大猿は、〔わたしを〕去勢しました。これは、わたしがかつて、他人の妻を犯した行為の報いだったのです。
- 438 それから、わたしは死に、シンダヴァの林で生涯を終えて、片目でびっこの牡山羊の胎に宿りました。
- 439 わたしは、去勢されて、幼児たちを〔背に〕乗せて運ぶこと、十二年間でした。そして、虫類に悩まされ、病気にかかりましたが、これもまた、かつて他人の妻を犯したためです。
- 440 それから、わたしは死んで、牛商人の所有する牡牛から生まれました。わたしは、樹脂おすに似た銅色の牡の子牛で、十二カ月たって去勢されました。
- 441 わたしは、再び犁と車を引きました。盲目となり、悩み、病気にかかりましたが、これもまた、かつて他人の妻を犯したためです。
- 442 それから、わたしは死んで、街道筋にある婢女はしための家に生まれ、女性でもなく男性でもありませんでした。これもまた、かつて他人の妻を犯したためです。
- 443 三十歳のとき、わたしは死に、車夫の家の娘として生まれました。この家は、貧しく財乏しく、債権者にたいして多くの借金をもっていました。
- 444 その後、〔借金が〕累積し大きく増大すると、隊商の主は、泣き悲しんでいるわたしを、家から引きずり出しました。
- 445 やがて、わたしが十六歳になったとき、その名をギリダーサと呼ぶ

かれの息子は、わたしが妙齡に達したのを見て、〔わたしを〕嫁にしました。

- 446 かれ〔夫〕には、他に妻がありましたが、彼女は、身を修め婦徳を具え、世に知られ、〔夫に〕愛されていました。わたしは、この夫に憎しみの念を起しました。
- 447 婢女のように仕えていたわたしを、かれらが捨てて行ってしまったことは、かの〔前世の〕業ごうの結果であります。〔そして、いま〕わたしは、それを終滅しました。』

<脚注>

- (1) *Sn.* 108.
 (2) *Sn.* 123.
 (3) 『中阿含経』第26巻（大正蔵、1巻594ページ中）。
 (4) *Sn.* 110.
 (5) *Sn.* 106.
 (6) 例えば、*Āpastamba-dharma-sūtra*, I, 7, 8f. (*SBE.* vol. II, p. 74f)
 (7) 『マヌ法典』8・352以下。
 (8) *Dhp.* 246.
 (9) *Sn.* 123.
 (10) *Dhp.* 309—310.
 (11) 『方广大莊嚴経』第1巻（大正蔵、3巻542ページ上—中）。なお『仏本行集経』第6巻（大正蔵、3巻678ページ中—下）にも同様の記述がある。
 (12) 池田澄達『マハーバーラタとラーマヤナ』（日本評論社、昭和18年）、86—88ページ。なお池田教授の指摘によると、『大智度論』第12巻（大正蔵、25巻157ページ）では、女人が『多くの人を共に夫とする』ことを、悪しきことがらとして非難している。
 (13) *Therig.* 72.
 (14) *Therig.* 406; 420; *bhattuno denti.* (*AN.* IV, pp. 265, 267.)
 (15) *Therig.* 406.

(16) *Therig.* 420.

(17) *AN.* IV p. 92G.

(18) *kumārī seṭṭhā bhariyānaṃ* (*SN.* vol. 1, p. 6G) 『若於娶妻中，童女為最勝』
(『別訳雜阿含經』第12卷，大正藏，2卷458ページ下)。現代インドのサンスクリット語では英語の Miss を「クマリー」と呼ぶ。

(19) *Isidāsī Sanchī inscription* II, No.29 によるとその刻銘のついた寄進品は *Isidāsī* という *bhichunī* (= *bhikkhuni*) の献納であるが、かの女は「*Sagharakhitā* の母」と称している。故に出家する前には結婚していたにちがいない。しかし『テューリーガーター』に出て来るこのインダージーと同一ではないかもしれない。

(20) *Therig.* 414—429.

結 語

以上僅かの事例を紹介したにとどまるが、ゴータマ・ブッダに帰依した人々は、それぞれ人生について、あるいは自分がどのように生きて行ったらよいか、ということについて、悩みをもち、煩悶していたが、たまたまゴータマ・ブッダとの出会いによって大きな転換が起ったのである。